

ニューレフト時代のテイラーの理論と 政治活動 (2・完)

梅 川 佳 子

目次

はじめに

第1節 テイラーによる理論誌の創設と核兵器廃絶運動

- (1) テイラーによる『ユニヴァーシティーズ・アンド・レフト・レビュー』の創設
- (2) ニューレフト
- (3) テイラーの核廃絶運動

第2節 テイラーと初期マルクス

- (1) 疎外
- (2) 初期マルクス
- (3) ソーシャリズム (以上、第261号掲載)

第3節 テイラーのソーシャリズム

- (1) 定義
- (2) 疎外克服としてのソーシャリズム
- (3) 社会連帯としてのソーシャリズム
私企業の方と人民の方
連帯としてのソーシャリズム

第4節 コミュニズム批判

- (1) テイラーとトムスンの関係
- (2) テイラーのコミュニズム批判
- (3) トムスンとの論争の中で示されたテイラーの特徴

おわりに

第3節 テイラーのソーシャリズム

前節（法政論集第 261 号掲載）の最後に、テイラーのソーシャリズムの定義についてふれたが、本節では、改めてその定義を抽出して、次に、その定義の要素を順に説明する。

定義

前の第 2 節で、テイラーが、主にマルクスに依拠しながら述べた疎外論を検討した。それを基礎にして、筆者は、テイラーのソーシャリズムを、下記のように述べた。これを〈仮定義 1〉として、再度、述べておく。

- [1] 現代資本主義社会（産業社会と呼ばれることもあるが）における疎外を克服しなければならないこと。その疎外克服の方法として、社会や経済の全般における民主化を行うこと。
- [2] 疎外克服によって、市民が共有できる意味と社会的絆を構築すること。

なお、テイラーは、ソーシャリズムを、1958 年の論文“Alienation and Community”では次のように定義していた。これを〈仮定義 2〉とする。

ソーシャリズム（socialism）は、人々が解決策を発見することができ、[1] 疎外なき産業社会を建設することができ、専制や閉鎖的社会への逆戻りなくして [2] 意味のある社会的絆を再創造できる（recreate meaningful social bonds）という主張として定義される¹⁾。（なお〔 〕は筆者による）。

さらに論文 1960 年の論文“Changes of Quality”では、次のように定義

1) Charles Taylor, “Alienation and Community”, *Universities & Left Review*, 5, Autumn 1958, p.11.

している。これを〈仮定義3〉とする

ソーシャリストの方向にむかう、社会における重要な質的変革とはどのようなものであろうか。それらは、・・・現代社会と質的に異なる社会であり、例えば、〔1〕利潤（profit）の基準よりも、人々のニーズの基準のほうが、より重要な社会であろう。さらに〔2〕社会的連帯（social solidarity）の価値が、救貧法の価値にとって代わる社会であり、生活の諸条件に対するコントロールが、〔市場の〕力によってではなく、人民によってなされる社会である²⁾。（なお〔 〕は筆者による）。

以上の仮定義〈1〉、〈2〉、〈3〉の中でも、特に「疎外」と「連帯」に注目したうえで、それらを総合すると、下記のような本定義をつくることが可能ではないかと思われる。

〈テイラーのソーシャリズムの定義〉

- 〔1〕〈疎外克服論〉疎外なき社会の建設。そのためには、利潤の基準よりも、人々のニーズの基準を使用し、社会や経済の全般における民主的改革を行うこと。
- 〔2〕〈社会連帯論〉意味のある社会的絆、換言すれば社会的連帯の価値を優先させ、市民生活のコントロールを、市場の力によってではなく、人民自身が行うようにすること。

ニューレフトは、「スターリン主義のコミュニズム」(Stalinist communism)と、労働党の「社会民主主義」(social democracy)という1950年代に支配的であった2つの左派の教義を、すでに衰退したものとして退け、ソーシャリズムの基礎的な道徳的かつ知的な理論を再考するという努力をつづけてきた³⁾。ここで定義としてまとめたものは、そのニュー

2) Charles Taylor, "Changes of Quality", *New Left Review* I /4, July-August 1960, p.3 (以下CQと略記する。); チャールズ・テイラー「質的変革」田村進編『現代革命へのアプローチ』合同出版社、1962年、51頁。

3) Charles Taylor, "Marxism and Socialist Humanism" in Robin Archer, Diemut Bubeck, Hanjo Glock, Lesley Jacobs, Seth Moglen, Adam Steinhouse, and Daniel

レフトの1人であるテイラーが1960年ごろに到達した立場である。以下では、テイラーのソーシャリズムの定義の第1から順に、その意味するところをより詳しく述べる。

(2) 疎外克服としてのソーシャリズム

テイラーのソーシャリズム定義のうち、第1は、疎外なき社会の建設であった。疎外とは、人がもともと持っている諸要素のうちの一部を、外に取り出されてしまい、人がもっているはずの諸要素が欠損している状態である。例えばある職人が、自分自身やその技術を自分で再生産して自分で管理し、これらを使って、自分の計画した作品を自由に作り上げるような一種の理想的なモデルを考えてみる。このとき、この人は、身体化した自己の一体性を維持し、空間的にも時間的にも自己の自由を行使する。しかし、人が、自己自身の一部の要素をはく奪され、これらを管理して自己と一体化することができなくなるとき、これは疎外の発

Weinstock (eds.), *Out of Apathy : Voices of the New Left thirty Years On : Papers Based on a Conference Organized by the Oxford University Socialist Discussion Group*, Verso, 1989, p.59. (以下、MS と略記する。) ケイト・ソパーによれば、当時トムスンによって擁護された「ソーシャリスト・ヒューマニズム」の核となるテーマは、労働党・社会民主主義の「実利主義」とスターリニストのコミュニズムの拒否であったとされる。ソーシャリストの解放への唯一の道は、両者の間、すなわち道徳的自律性と、歴史的エージェントすなわち歴史における個人の主体性の肯定にあるという主張である (Kate Soper, "Socialist Humanism" in Harvey J. Kaye and Keith McClelland (eds.), *E.P.Thompson : Critical Perspectives*, Polity Press, 1990, p.204.)。トムスン自身は「ソーシャリスト・ヒューマニズム」の意味を次のように記している。ヒューマニズムは、「ソーシャリストの理論と大志 aspiration の中心に、知れ渡った抽象概念——共産党、マルクス主義・レーニン主義・スターリン主義、2つの陣営、労働者階級の前衛——を置くのではなく、再び現実の男性と女性を位置付ける」ことである。ソーシャリズムは、「現実の男性や女性による革命的可能性への信仰を再び主張する」(E. P. Thompson, "Socialist Humanism: An Epistle to the Philistines", *The New Reasoner*, Summer 1957, number 1, p.109.)。トムスンは、イギリスにおける「マルクス主義者とコミュニストの伝統」を「再発見」し「再肯定」しようとする (E. P. Thompson, "Editorial", *The New Reasoner*, Summer 1957, number 1.)。しかし、トムスンの「ソーシャリスト・ヒューマニズム」を、ニューレフトの誰もが支持していたわけではなかった。例えば当時のニューレフトの1人であるハリー・ハンソン Harry Hanson はトムスンの思想を「ロマンティズム」であり、「ユートピアのソーシャリスト」(Utopian socialist) であると批判している (Harry Hanson, "An Open Letter to Edward Thompson", *The New Reasoner*, Autumn 1957, number 2, p.87.)。

生である。疎外が発生する局面はさまざまなものが考えられる。しかしテイラーが、このとき問題にしたのは、資本主義による疎外であった。

人がもともと持っているはずの諸要素が欠損したとき、これを警告する用語がニーズであり、人はこれを使って欠損要素をとりもどそうとする。疎外の克服のためには、このニーズの充足をしなければならない。テイラーは、人々の社会的「ニーズの基準」を、資本主義における「利潤の基準」よりも優先することを目指し、社会における「優先順位」(priorities)⁴⁾の変更を提案して次のように述べている。

私たちは、これらの〔福祉〕サービスをまともな水準にまで引き上げることがいつまでも困難な闘争であるような社会に住むべきではない。福祉の増加については注意深く、しぶしぶ吟味されるが、〔実は〕資金は見つけることができるのであり、その多くが、爆弾やロケット、広告、包装、投機的建築物、機会仕掛けの道具類のような…ものために使われている。このような社会にわれわれは住むべきではない。われわれは、完全に読み書きができるということが、今日「防衛」(defence)が考えられているのと同じ程度に緊急に必要であるような社会に、なぜ住めないのだろうか⁵⁾。

ここでは、政府の軍事費や企業の広告費や投機資金にまわされる資金を、福祉サービスや教育という、人々が真にニーズとしている分野にまわすべきだと述べられている。テイラーは、これができないのは、資本主義社会においては、利潤の基準が、ニーズの基準よりも優先されており、それをわれわれが当然と思わされているからであると主張する。

「自由企業」経済・・・は、私たちの想像力を拘束し、私たちの希望を閉じ込めてしまうほどである。なぜ私たちは、私たちの関心を、福祉の伝統的形態に制限しなければならないのか。なぜ私たちは、概ね利益のために運営されている文化機関に我慢しなければならないのか。なぜわれわれは、骨の折れる仕事や、単調な仕事を、

4) CQ, p.3 : 邦訳、51 頁。

5) CQ, p.3 : 邦訳、51-52 頁。

自動化してはならないのか。しかしこんなことは、考えに浮かんでくることさえもない⁶⁾。

このようにテイラーは、「自由企業」経済が、人々の想像力と希望を抑圧してしまうと考え、それに対してニーズの基準に基づく社会改革が必要であると考えた。

このような見解にもとづいて、彼は、労働党右派を批判する。当時右派は労働党の主導権を掌握しており、保守党と交代で福祉国家を運営していた。テイラーは、この労働党右派の漸進的改革は、市場における利潤の獲得と協調するものであって、改革になっていないと考え、これを批判した。

テイラーからすれば、真の改革は、人々のニーズを満たすための「人民の活力と創意」(the energy and ingenuity of people)を通じて行われるべきものであった。そのニーズが何であるか、ニーズを満たす政策は何か、これらの点について、労働党の幹部が勝手に決めるのではなく「市民の活力」を生かすべきであると考えた。

テイラーは、労働党右派の掲げる漸進的改革の問題は、「それが小規模であるということだけではなく、この範囲の問題にさえ正面から取り組むことが決してないということ」であると述べている。ここでいう「範囲の問題」とは、改革が対象とすべき問題の範囲のことである。労働党右派は、改革の「範囲」を、企業の利潤獲得と調和する範囲に限っている。その原因は、労働党の幹部の既成観念がそうになっているからである。

それでは、「範囲の問題」を克服するにはどうすればよいのか。テイラーからすれば、真の改革は、人々のニーズを満たすための「人民の活力と創意」(the energy and ingenuity of people)を通じて行われるべきものであった。「人々のニーズ」は、労働党の幹部がたとえば「ギャラップ世論調査」を使ったからといって決められるものではない。市民の労働がより創造的であるべきだとする人々の意識を、労働党が引き出すことができるわけではない。テイラーは、ニーズが何であるか、ニーズを満たす政策は何か、これらの発見は市民自身にしかできないと考えたのであ

6) CQ, p.3: 邦訳、52頁。

る⁷⁾。こうして、「人民の活力と創意」が活かされるならば、上記の「範囲の問題」は克服されるであろう。

(3) 社会連帯としてのソーシャリズム

私企業の力と人民の力

テイラーのソーシャリズムの定義の第2は、社会的連帯であった。彼が関心をよせた社会的連帯とは、社会のメンバーのなかで、誰もが、とくに深い疎外に苦しむ人々のことを思い、その疎外の克服のために、ともに協力して努力することである。当時のテイラーは、とりわけ経済的な疎外について触れている。彼は、彼独特の語り口で、「救貧法によってかわる社会」を形成したいとして、次のように述べる。

第2の要点は、次のように表現できるかもしれない。私が救貧法の価値に基づく社会と呼んだものは、その底辺の人々が一定の最小限の水準以下に落ちないことだけに関心をよせる社会である。しかし、労働党の伝統の中心的目的の1つは、この社会を攻撃して、この社会を連帯（solidarity）の価値——われわれはすべての人にひとしく最善のものを与えねばならないということ——に基づいた社会へと置き換えることであったはずである⁸⁾。

現代社会には「救貧法」という法律はないので、これは比喩的な表現である。救貧法の価値に基づく社会とは、底辺の人々が最低限の水準以下に落ちないことだけに関心を限定する社会である。社会のセーフティーネットだけあればそれで良いとする社会であり、それ以上のニーズについて、連帯意識をもち、社会改革を進めようとはしない社会である。このような考え方に対して、彼は次のように批判する。

救貧法の社会は、底辺にセーフティーネットをはる。なぜなら救貧法的前提は、私たちは〔社会の〕上部に到達するために互いに助

7) CQ, p.4: 邦訳、54頁。

8) CQ, p.3: 邦訳、52-53頁。

け合うこともできないし、してはならないというものであるからだ。実際に私たちの社会の上部は、人々を押し分けて進んでこそ、初めて辿りつけるところである。したがって、このような社会は、2重基準を生み出す社会である。あなたが梯子の段で手に入れるものと、セーフティーネットの中であなたに与えられるものの間に差がなければならぬ⁹⁾。

ここで述べられているように、資本主義社会は、厳しい競争社会である。現代社会は、これを是認している。「私たちの社会の上部」すなわち成功者のグループに入るためには、「人々を押し分けて進む競争に、勝たなければならない。しかも成功と失敗の格差がなければ成功を識別できないのだから、成功者が「手に入れるもの」と「セーフティーネットの中であなたに与えられるものの間」には、かならず格差がなければならない。「セーフティーネット」で与えられる生活は、最低のものでなければならないのである。

だから、テイラーは、「救貧法の価値に基づく社会」は、人々の相互の助け合いを妨げ、人々を分断すると言う。テイラーによれば、このような「救貧法の価値に基づく社会」こそ、「戦後の労働党政府が深刻に攻撃しようとしてきたものの1つ」であったはずであった。たとえば、労働党政府は、「健康保険制度」(the Health Service)を開設した。しかしテイラーは、それにもかかわらず、労働党政府は、実際には「救貧法の価値に基づく社会」を作り出してしまっていると主張する。「2重基準」の傾向は、福祉の分野で機能するだけでなく、「教育」、「鉄道」、「鉱業」の分野においても、機能しているのである。その結果、次のような状況が発生している。

われわれは急速に次のような社会に向かって進んでいる。それは、一方で、先進的で繁栄している産業における労働者は、譲歩を力づくで手に入れるための交渉力を使うことができるが、他方で、衰退している産業や衰退している地域における人々は、セーフティー

9) CQ, pp.3-4 ; 邦訳、53頁。

ネットという慰めとなる網の目に達するまでは、自ら責任をとらされるような社会である¹⁰⁾。

テイラーは、このように論じて、「救貧法の価値に基づく社会」が、労働者の中に「2重基準」による不平等を生み出していると指摘する。つまり、競争基準と最低のセーフティーネットという2重基準である。しかし、もちろんテイラーにとって、この2重基準の社会は、連帯に基づく社会へと変革されるべきものである。そのためには、生活条件に対するコントロールが、市場の競争力ではなく、人民によってなされる社会にすることが必要である。すなわち、

われわれは、〔市場の〕諸力 (Forces) ではなく、人民 (people) が管理する社会を欲している。私が「諸力」と言う理由は、私たちが「無責任な社会」に住んでいるからである。無責任な社会においては、人々の生活に影響を与える主要な諸決定が、人民自身によってなされるのではなく、責任を負わされる専制的な権威によってさえ、なされるわけではない。都心にそびえ立つオフィス街や地方へとさらに不規則に広がるベッドタウンをもつ「急速に広がる大都市」を私たちが作る予定であるということも誰も決定していない¹¹⁾。

このようにテイラーは、既存の社会では、資本主義的な私企業の市場における「諸力」が社会を管理していると言う。たとえば「都心にそびえ立つオフィス」の建設も、「地方へとさらに不規則に広がるベッドタウン」も、不動産業者をはじめとする多くの私企業の個別でランダムな営利目的の諸決定が入り混じることによって、結果的に建設されている。

ここでテイラーが問題にしているのは、社会における決定が、「人民」でもなく、「専制的権威」でもなく、それ以外の具体的に特定できる何者かによってなされているのでもない、そのような状況である。すなわち、市場の「諸力」が支配する社会の問題とは、誰も責任をとることができない状態で社会が生み出されている、ということである。そして、

10) CQ, pp.3-4 ; 邦訳、53頁。

11) CQ, p.4 ; 邦訳、53-54頁。

それを克服するために、「人民」によって決定がなされることを期待して、テイラーは次のように述べる。

最終的な結果は、投機的な利潤 (speculative profit) の諸要求との調和にある。もし、あなたが非難する相手を探しているのならば、非人格的な「市場の諸力」(Forces of the Market) について考えるよう導かれるだろう。私たちは、社会としての私たち (us as a society) によって決定されうる問題があるということを認識するときが来た。そして民主主義社会において、問題は人民 (the people) によって決定されなければならない問題があるということを認識するときが来た¹²⁾。

社会における決定が、投機と利潤追求によって、すなわち「市場の力」によってなされている状態は変革されなければならない。その際、重要なことは、民主主義社会においては、「市場の諸力」ではなく、「社会としての私たち」によって決定がなされなければならないということである。社会のあり方が「人民」によって決定される時、われわれははじめて「民主主義」社会をつくることができる。テイラーの用語「人民」はきわめて茫漠としているが、彼が当時考えていたことは、この「人民」で表現される力を登場させることで、社会の中のニーズを発見し、それを充足するための改革をしたいということであり、彼は次のように論じる。

今や社会における質的で（革命的な）変化は、私たちが漸進的な改革の観点においてのみ語っている限り議論することすらできないものである。それは学校にもっと支出することや、年金受給者により多くの金額を与えるような問題ではない。それは、販売や市場拡大や、製品の買い替えを促すための意図的旧式化のために物——爆弾を含む——をデザインすることではなく、人間のニーズを満たすために、人民の活力と創意 (the energy and ingenuity of

12) CQ, p.4: 邦訳、54頁。

people) が、当然のこととして、使われる社会をもつという問題である¹³⁾。

テイラーは、資本主義的な市場価値が支配する社会ではなく、「人間のニーズ」の支配する社会をつくるために「人民の活力と創意」が発揮される社会でなければならない、と考えた。

連帯としてのソーシャリズム

ソーシャリズムのイメージについて、イギリス労働党内では、意見が対立していた。テイラーによれば「左派は、右派の漸進的改革に反対する傾向」にあった。テイラーは、これまで述べてきたように右派の漸進的改革を批判しており、これのもつ問題は、先に述べた「規模」の問題に限られないと主張する。そこには、目的と手段をどのように考えるかという問題もあるという。

右派は、「国有化が手段であって目的ではないと言う」が、テイラーはこの点を批判する。「通常、人々は『手段』と『目的』を想定し、「それらは互いに別々に存在」していると思っている¹⁴⁾。しかし、このように目的と手段を分離する考え方は、彼の考えるソーシャリズムへの道を考える際には、不適切である。

前にテイラーのソーシャリズムの定義の第1は疎外克服であることを見た。もしソーシャリズムが、疎外克服だけであれば、疎外克服を「目的」とした資本主義の抜本改革のために、つまり「手段」としての国有化を行うのであり、そのために政治権力の掌握が必要だ、と考えることもできるかもしれない。

しかし、テイラーのソーシャリズムの定義には、第2の社会連帯があった。しかもこの連帯には、前の節で述べたように、産業デモクラシーをはじめ、人民による教育やメディアなどに対する「社会的コントロール」が含まれていた。これは、資本主義の時代である現代において、今すぐに、行わなければならない課題と考えられている。したがって、テイラーにとって、社会連帯としての人間関係の形成は、それ自体がソーシャリ

13) CQ, p.4: 邦訳、54頁。

14) CQ, p.4: 邦訳、56頁。

ズムであり目的であった。彼によれば、

共同所有 (common ownership) とソーシャリズムの関係は、このような種類の関係〔手段と目的の関係〕ではない。それは、一連の諸制度と、一連の諸制度が具現化する人間的な関係の関連である。しかしこれらの関連の質は、人間的な関係を具現化する一連の諸制度なしでは、空中にバラバラに存在し得るものではない¹⁵⁾。

この引用箇所第2の文章では、「共同所有」とソーシャリズムの関連は、「共同所有」を含む「一連の諸制度」と、「人間関係」の関連であると言われている。しかも第3の文章で、両者の「関連の質」は、「人間的な関係を具現化する一連の諸制度」があってはじめて、担保されると述べられる。換言すれば、「一連の諸制度」が、どの程度「人間的な関係」を具現化しているかによって、「共同所有」が、どの程度ソーシャリズムとして評価されるかが決まる。だから、いかに共同所有を行っても、これが単に将来の社会主義のための「手段」と考えられるならば、その「手段」の中であらたな疎外が、極端な場合には、官僚制的な支配が登場することも想定できる。このようなことは、スターリニズム批判を通過してきたテイラーにとって、とうてい容認できるものではなかっただろう。彼は「共同所有」においてもなお、「人間的な関係」を反映していなければソーシャリズムとしては意味がないと考えている。彼によれば、

〔ソーシャリズムへの〕移行は、ある制度の根本的变化やある制度の廃止、制度の創設、だけであるべきではなく、ソーシャリズムの制度にソーシャリズムの内容を与えるような生活の準備、かつ諸関係の形成でなければならない¹⁶⁾。

ここで言われる「生活の準備」と「諸関係」は、前の「人間的な関係」であり、この点の構築がないかぎり、共同所有などの「制度の根本的変

15) CQ, p.4 : 邦訳、56 頁。

16) CQ, p.4 : 邦訳、56-57 頁。

化」を行っても、意味がない。テイラーによれば、ソーシャリズムへの移行において重要なことは、「ソーシャリズムの制度を形成する人々の積極的努力（the positive effort of people）が、2 次的な重要性をもつ活動以上のもの、つまり階級闘争の補助役（an adjunct）以上のものであるという信念」である¹⁷⁾。その「人々の積極的努力」の重要性について、テイラーは次のように述べる。

ソーシャリズムの社会のようなものとして認識できる社会は、次のような条件の下でのみ生じうる。それは、政治的变化が生じる時やそのずっと前に、例えばまずは地方のレベルで、最終的には全産業のレベルで、労働者の生活に影響を与える諸決定における発言権（a say）を要求する労働者の運動があるという条件、そして地方政府におけるソーシャリズムの政策を要求する人々の運動があるという条件である¹⁸⁾。

このようにテイラーは、ソーシャリズムが、制度的変化を必要とするだけでなく、「人々の運動」があるという条件下においてのみ生じうると考える。人々の運動は、「地方のレベル」から始まり、しだいに「全産業のレベル」に拡大するものであり、「発言権を要求する労働運動」や、「地方政府の政策に影響を与えようとする人々の運動」である。この運動の伝統は、「コミュニティの全てのメンバーに人間の重要なニーズを供給するためのコミュニティ全体による責任を確立する」という伝統である¹⁹⁾。

このように、ソーシャリズムは、前の定義でも述べたように、連帯としての運動である。連帯とは、人びとが、その疎外克服を目指して、ニーズの充足するために協力していくことであった。これは人びと自身の活動であり、成長であり、自分たちも豊かになっていく運動であった。もし社会改革が、このような人びとの創意によってではなく、一部の指

17) CQ, p.5 : 邦訳、56-57 頁。

18) CQ, p.5 : 邦訳、58 頁。

19) Charles Taylor, "What's Wrong with Capitalism", *New Left Review* I/2, March-April 1960, p.9. (以下、WC と略記する。)

導者によって、その権力で行われるなら、人びとの持っている疎外克服の力も破壊されてしまう。テイラーの見解では、ソビエト連邦を作り出した革命は、「新しく再建されるために全てが破壊される」ものであり「大変動」(a cataclysm)としての革命であった。テイラーはこのような考え方は拒否している。彼は、「1917年に対するノスタルジアは永遠に去った」と述べる。彼は、「1917年の繰り返しは、現在の文脈において不可能であり不条理である」という理由だけではなく、「私たちが欲している種類のソーシャリストの革命ではない」からであると論じている²⁰⁾。したがってテイラーは、資本主義社会における間違った優先順位を正しいものにするためには、前衛による大変動としての革命ではなく、「人民の運動」を通じて「利益を重視するシステムの支配的な影響を排除し」ていく必要があると考えるのである。

テイラーは、このような「資本主義をコミュニティのニーズに適應させる試み」は、「資本主義システムの固有の性質と原動力と鋭く対立する」と認識する。たとえば、「子供にどのような教育を受けさせたいかとか、どのような家に住みたいか、病院の場所、道路整備の時期、50年後にどのような街に住んでいたいか、投資と福祉の割合」などの重要な事柄について、資本主義では企業による市場的な決定が行われるが、これらの重要な事柄は、以下のように、人々の民主的決定に委ねられるべきであると言う。民主的決定は、テイラーにおいては連帯の1つのあらわれにすぎないが、社会制度を改革しようとするとき、重要性をおびてくる。そこでテイラーの論じるところによれば、

これらの重要な事柄は、今日の社会において、まさに重要な民主的決定に委ねられるべきである。われわれは、資本主義を、家父長

20) CQ, p.5; 邦訳、58頁。「大変動」としての革命は、ニューレフトの指導者の1人であったトムスンも否定している。丸山真男は、当時の日本における左翼の考え方を批判しながら、トムスンの考え方に対して強い共感を示している(丸山真男・佐藤昇「現代における革命の論理」『現代のイデオロギー』第1巻、三一書房、1961年、189-235頁)。ニューレフトについては、日本では以下の文献においても紹介されている。河合秀和・前田康博「イギリス新左翼の発言——「政治的無関心からの脱出について」」『歴史学研究会編集 歴史学研究 11』第259号、青木書店、1961年；大嶽秀夫「イギリス新左翼の思想と運動——前期ニュー・レフト(1956-1963)を中心として」『法学論叢』第156巻、第3・4号、京都大学法学会、2005年。

的な官僚制に置き換えたいのではない。非人間的な資本主義の優先順位を前にしたとき、唯一の政治的問題は、自由と責任の拡大を実現するために、そして社会を人々（people）がさらにコントロールするために、その優先順位をどのように理解することができ、変化できるのか、である²¹⁾。

このようにテイラーは、資本主義における優先順位を変化させるために、人々の「自由と責任」を拡大し、人々が自己の社会を統治できるようにすることが重要であると考えたのである。

第4節 コミュニズム批判

第3節で述べたテイラーのソーシャリズムの定義は、当時のソビエト社会主義などとは全く異なっている。彼におけるソーシャリズムとは、疎外の克服と連帯であり、これはスターリニズムに流れ込むところの、いかなる権威主義も否定するものであった。テイラーは、当時のコミュニズムにはスターリニズムの萌芽があると理解して、これを厳しく否定している。テイラーのソーシャリズムを理解するためには、この点をはっきりさせることが特に重要である。なぜなら、これまでテイラーがニューレフトの指導者であったことについて述べたが、実はニューレフトは、共産党との距離をめぐって、2つの傾向を包含していたからである。そこで、テイラーのソーシャリズムをニューレフトのソーシャリズムと理解するとしても、マルクス主義との関係を明らかにしなければならない。

本節で述べたいことは、テイラーのソーシャリズムが、マルクス主義とは明確に違うという点である。ニューレフトの中には、たとえばトムスンのように、マルクス主義に夢をのこしている者もいたが、テイラーはこのような思想傾向を批判する。これまで述べてきた彼の疎外克服と連帯のソーシャリズムは、マルクス主義の一翼ではなく、それを批判する中で登場する。この点を説明するために、マルクス主義の再生を目的にしたトムスンとの論争をとりあげ、テイラーのソーシャリズムの特徴

21) WC, p.11.

を明らかにする。

第1節で述べたように、ニューレフトには、テイラーたちの第1グループの他に、共産党をやめて出てきた人たちの第2グループがあった。この第2グループの指導的理論家であったトムソンは、まだコミュニズムに対する親近感を維持していた。したがって、トムソンは、テイラーがコミュニズムを全面否定した点に反発し、両者の間に論争が生じた。

この論争は、スターリニズムの萌芽がコミュニズムにあるのか、それともないのか、この点をめぐって行われた。本節では、第1に、テイラーとトムソンの関係について説明し、第2にテイラーのコミュニズム批判についてまとめて、第3にトムソンの反発について述べ、ニューレフトの中でのテイラーのポジションを明らかにしたい。

(1) テイラーとトムソンの関係

ニューレフトには2つの源流があったことはすでに述べた。第1が、元共産党員であって、ハンガリー事件をきっかけとして共産党から出てきたグループである。この第1グループは、すでに共産党の内部で自分たちの雑誌を持っていた。その雑誌が『ニュー・リーズナー』であったので、本稿では、彼らをNRグループと呼ぶことにする。これに対して、第2グループが、共産党とは関係なく『ユニヴァーシティーズ・アンド・レフト・レビュー』誌を創刊したULRグループである。

ULRグループの指導的人物の1人がテイラーであり、NRグループの理論的指導者の1人がエドワード・トムソン E. P. Thompson であった。デニス・ドゥオーキン Dennis Dworkin は、これらのニューレフトの2つのグループの違いを次のように述べている。

2つのグループの間の緊張は、マルクス主義に対する彼らの態度において最も明白であった。NR誌のソーシャリストたちは、スターリン主義者の歪みを取り除いてマルクス主義を新たな創造的方法において発展させることによって、マルクス主義者の理論を活性化しようとした。彼らは、マルクス主義に何が起こったのかだけを考え、マルクス主義それ自体がもつ問題を考えなかった。他方で、ULR

誌に関与する若い世代は、マルクス主義を、彼らの遺産の重要な一部として認めだが、彼らは、現代社会の複雑さを理解するためにマルクス主義が有効であるかどうかを疑っていた²²⁾。

ドゥオーキンはこのように2つのグループの違いを整理した上で、*ULR* 誌に関与したテイラーについて、「マルクスの本を読むのに最も関心をも」ち、マルクスの著作の中で『疎外』を強調した初期のヒューマニスティックな著作に不可避免的に惹きつけられた²³⁾ が、その後の Kommunismus の思想については、これが権威主義に向かう傾向をもっていると考えた、と述べている。このようなテイラーに対して、Communismus を再生させようとするトムスンとの間に、論争が起きるのは、当然であった。

ケイト・ソパー Kate Soper が言うように、テイラーは、トムスンによるスターリニズム批判に「最も理解を示し」²⁴⁾ た。しかしテイラーは、スターリニズムに関する彼自身の見解とトムスンの見解との共通点と差異について、以下のように述べる。

私は、スターリニズムを、1つのイデオロギーとして、つまり現実についての不十分で、特定の主義に偏った、歪められた見解として考える点で、トムスンに同意する。しかし理論的なレベルでは、私は、このイデオロギーが、「経済的自動主義」(economic automatism) の1種として十分に特徴づけられるとは考えない²⁵⁾。

このように、テイラーとトムスは、スターリニズムを「1つのイデオロギー」として捉える点で共通しているが、そのイデオロギーをどのように特徴づけるかという点に関しては考え方を異にしており、さらにCommunismus に対する見解も違っていた。そこで以下では、これらの相

22) Dennis Dworkin, *Cultural Marxism in Postwar Britain: History, the New Left, and the Origins of Cultural Studies*, Duke University Press, 1997, p.62.

23) *Ibid.*

24) Kate Soper, *op.cit.*, p.228.

25) Charles Taylor, "Marxism and Humanism", *The New Reasoner* 2, Autumn, 1957, p.92. (以下 MH と略記する。)

違点について詳しく述べる。

(2) テイラーの Kommunismus 批判

テイラーは、まずスターリニズムに関しての総合的な評価として、以下のように、それは「最悪の種類の特外」であると述べる。

スターリン主義の官僚たちは、人々の自発的行為 (spontaneous action of the masses) を欠いた、あるいは人々の自発的行為があるにもかかわらず、新たな人間の性質を作りだそうとした。その結果は、・・・最悪の種類の特外 (alienation) である²⁶⁾。

それでは、この特外はどのような理論的な原因からもたらされたのだろうか。筆者の理解では、テイラーは、以下の3点の問題を考えていたようである。すなわち、第1に経済的自動主義の問題、第2に拘束のない主意主義の問題、そして第3に、労働者階級概念の問題、である。彼にとって、これらは Kommunismus がもともと内包していた問題であり、スターリニズムの萌芽であった。

テイラーが第1に問題にするのは、当時の Kommunismus が持っていた「経済的自動主義」である。これは経済が変化すれば政治や思想なども変化するという考え方である。このこと自体は、トムスンはじめ多くの論者が述べていることでありテイラーの独創的な指摘ではない。しかし、テイラーの独自性は、「経済的自動主義」が、共産党の幹部自身を拘束するものではなかったと指摘した点にある。本当に経済が決定するのなら、共産党幹部の思想や行動も制約されるはずである。ところが、スターリン主義者は、粛清の殺人まで行って、それを正当化できたのだから、究極的自由を持っていた。したがって、彼らの行動が経済によって制約されていたとは言えないだろう。

そこでテイラーは、スターリン主義の幹部が自由に行動できた理由は、Kommunismus が持っていた第2の問題点である「拘束のない主意主義」

26) MH, p.94.

(unbridled voluntarism)²⁷⁾にあったと考えた。つまり、 Kommunismusにおいては、共産党の幹部に関しては例外扱いとされており、彼らに対しては経済からの拘束とか、土台としての経済関係からの拘束などは想定されていなかった。そのため、彼らは、自分の思うままに行動することができた。テイラーは、この意味で共産党幹部にだけは「拘束のない主意主義」が認められていたと考えたのである。

このような「拘束のない主意主義」の下では、すべての個人の行動の創造性が共産党幹部に独占され、それ以外の人からは剥奪される。テイラーの言い方では「人間の創造的で知的な対応は、党の官僚制に集中されているのである。党の官僚以外の「残りのヒューマニティ」すなわち、全ての人たちは、党員であれ党員でない人であれ、幹部が決定する「客観的限界の内部で」生活しなければならない²⁸⁾。テイラーは、以下のようにも述べている。

極端な経済決定論と拘束のない主意主義は、スターリン主義者の弁証法の2つの構成要素である……。理論的なレベルでは、スターリン主義者のイデオロギーは、それゆえ単純な「経済的自動主義」(economic automatism)ではなく、それと関係して歴史を判断する側〔共産党幹部〕の人間の限界の拒否、つまり一種の歴史的独我論(historical solipsism)である²⁹⁾。

ここで「歴史的独我論」という言葉が使われているが、この点について述べておく。前に述べた「拘束のない主意主義」では、幹部は究極的な自由をもっている。しかも幹部も人間であり利己的な判断も行う。しかし、そのような場合であっても、幹部の行動を正当化するために、もっともらしい歴史的法則などが引用されるであろう。これが「歴史的独我論」の意味である。したがって、それは、「拘束のない主意主義」を言いかえたものとも言えよう。これが、いかに凶暴なものになるかは、拙稿「チャールズ・テイラーとハンガリー事件（1956-1957）（上）」（法政

27) MH, p.93.

28) MH, p.93.

29) MH, p.93.

論集第 257 号)の第 2 節で、ライク裁判やモスクワ裁判に対するテイラーの批判について述べた中で、すでに確認した。

第 3 の問題点としてテイラーが挙げたのが、コミニズムにおける労働者階級概念である。スターリニズムを可能にしたレトリックの 1 つが、階級としての「プロレタリアート」という概念であった、とテイラーは考える。彼は以下のように指摘する。

このこと〔スターリニストの態度〕はもちろん、伝統的なマルクス主義者の言語の中に隠されてきたのだが、創造的な力は「労働者階級」(working class) 全体の中にあると想定されていた。しかしこの「労働者階級」という定義は、奇妙な定義である。「労働者階級」はきわめて抽象的な実体であり、現実の生身で血気さかんな労働者たちも、政党の装置も、どちらも含んでいない。実際には、それは後者〔政党の装置〕を覆い隠すものであった³⁰⁾。

このようにテイラーは、「労働者階級」という概念は、きわめて抽象的であり、実際の労働者個人たちを「含んでいない」と言う。なぜなら、抽象的な概念を扱うのは共産党の幹部であり、「階級」の内容は共産党によって決定され、実際の個人としての労働者が関与できることではなかったからである。

しかし「労働者階級全体の中に」「創造的な力」があるとされたのだから、共産党の決定は、スターリニズムによっていかにひどい内容となっていようとも、「労働者階級」の「創造的な力」によるものとなり、合理化される。だから、テイラーのいうように「労働者階級」概念が、政党の実態を「覆い隠す」ことができたのである。テイラーからすれば、このようにしてスターリニズムが人間の創造的な力を独占したことは容認できないことであった。この点について彼は、以下のように批判している。

主體的なるもの (the subjective)、つまり人間の創造的な側面 (cre-

30) MH, p.94.

ative side of man) は、共産党の中に、・・・中央委員会の中に、そして最終的にはスターリン自身の中に、段階的に位置づけられていた。したがって、社会主義を作る (building) 仕事は、工学 (engineering) の観点から考えられていた。新たな真に人間らしい社会の創設は、重工業を建設する必要性と同種のものとして考えられていた³¹⁾。

こうしてテイラーは、創造的な力が、最終的にはスターリン自身に独占されていたと指摘する。スターリンは、社会を人工的な「工学」の観点から建設しようとした。そのため、結局、一般の人々の「真に人間らしい社会の創設」は否定された。言い換えれば、スターリン主義の官僚たちは「自発的行為を欠いた」人間の性質を作りだそうとしたのであり、その結果「最悪の種類疎外 (alienation)」が生じたのであった³²⁾。

テイラーの議論を理解するために、ここで「労働者階級」の意味について説明しておく。のちの議論を先取りすれば、労働者階級の意味とは、一方では労働する人びとの意思の総意と理解される。しかし、実際には共産党は、労働者階級の意味について、労働する膨大な人びとの間のなかで、1人ひとりの創意と議論の中から明らかにしていくものとは思っていなかった。

だから他方で、労働者階級の意味とは、共産党の幹部が決定する内容であった。なぜなら労働者階級の能力、すなわち歴史の方向を理解する能力は、その階級の指導者である前衛に集約され、これがさらに前衛のエリートに集約される。最終的にはスターリン主義者が、労働する人びとの運命を決定することができた。実際に労働する人びとに許されたことは、単純に命令に服することであった。まさにテイラーが述べたように、社会「工学」が確立した。

このような命令の権威は、第1に働く人びとの意思があって、これが第2に「労働者階級」の意思を形成するというプロセスが逆転することによって可能になっている。共産党の命令は労働者階級の意味を形成したのだが、労働者階級の意味が、もし働く人びとにとって、他者の意思であれば、働く人びとの意思の自由の余地があった。ところが、労働者

31) MH, p.94.

32) MH, p.94.

階級の意味は、働く人びとにとって自分達の意味であった。共産党から出てきた労働者階級の意味が自分達の意味である以上、これに反抗することは原理的に困難であった。こうして、共産党による人びとの意思の拘束は成功したのであるが、スターリニズムにとって労働者階級概念の果たした役割の大きさは明白であろう。テイラーは、この点を批判しなかったのである。

テイラーによれば、スターリンの下の理論家たちにおいては、労働者階級はコμμニズム社会を打ち立てる歴史的役割を担うと考えられていた。しかしながらテイラーは、以下に述べるように、現実には、その役割は党が担ったという。

労働者階級がその歴史的役割を担うだろうということを最終的に確かめるものは何もなかった。労働者階級の意識を覚醒させる先頭としての党が指導力を握らなければならなかった。しかしもし労働者階級だけが真に人間らしい世界を確立するという使命を持っていたとしたら、意識的な党派 (conscious wing) としての党だけが、その使命が何であるかを正しく知っていたのだろう。労働者階級が弱くなる、あるいは自発的に決起できなくなるにつれて、党の役割はより重要になった。したがって帝政ロシアにおいて、レーニンの下でのボルシェヴィキは既にプロレタリアートに対する党の優位を準備していた。次のステップは、スターリンのステップであった。それは、労働者階級とその歴史的使命を党それ自体と同一視することであった³³⁾。

このようにテイラーは、労働者階級とその歴史的使命が、共産党の使命と同一視されたと指摘する。こうして労働者階級という抽象的概念から現実の人々は投げ出され、追放され、政党という虚構の統一だけが残ったのである³⁴⁾。

33) MH, p.95.

34) テイラーは、ニューレフトの時代から約 30 年後に、前衛党批判を、「代理主義」(substitutionism) 批判として展開している。「代理主義」について、テイラーは以下のように定義している。「代理主義によって私が意味するのは、推定上の真の全員一致 (putative real unanimous) の意思の代理であり、その意思は『人

これまで述べてきたように、テイラーのスターリニズム批判においては、スターリニズム以外の共産黨員も、スターリニズムに連なる者として理解されている。たとえば、テイラーが「労働者階級」概念を問題にするとき、その問題性は、スターリニズムのみならず「伝統的なコミュニストの言語」にも隠れていたと述べられている。あるいは「人間の創造的な側面」は「共産党の中に、・・・中央委員会の中に、そして最終的にはスターリン自身の中に、段階的に位置づけられていた」と述べて、スターリニズムと共産党を連続して理解している。さらに、テイラーは「もし労働者階級だけが真に人間らしい世界を確立するという使命を持っていたとしたら、意識的な党派としての党だけが、その使命が何であるかを正しく知っていた」と述べて、スターリニズムの源流を共産党それ自体に認めている。このように、スターリニズムの原因を広く共産党や「伝統的なコミュニスト」に求める姿勢は、トムスンとは異なっていた。

（3）トムスンとの論争の中で示されたテイラーの特徴

トムスンにおけるスターリニズム批判は、テイラーより限定的である。トムスンは、過去のすべてについて、歴史発展の全局面、多様な民衆のイニシアティヴ、真正の自己活動・ヒロイズムを安易に一括して「スターリン主義だ」として片づけるのは「教条主義的トロツキズム」だとして、これを否定する³⁵⁾。

トムスンによるスターリニズム批判の意図は、ケイト・ソパーも言う

民] (mass of people) によってまだ合意されていないが、前衛のマイノリティ (a vanguard minority) の意思によって」代理される。「レーニンも、もちろん、代理主義者の政治への道を私たちの前に用意した主な人物であり、代理主義者の政治においては、前衛がプロレタリアートの名の下で支配権を得る。プロレタリアート (この概念はマルクス主義のレトリックにおいても用いられていたが) —つまり、1つの意思や歴史の方向性を負わせることのできるある種の超主体 (super-subject) —のような概念なしでは、レーニン主義者の代理主義者の政治の全体的な知的な基礎は崩壊するだろう。」(MS, p.66.)

35) E. P. Thompson, "E. P. Thompson", in Henry Abelove, Betsy Blackmar, Peter Dimock, and Jonathan Schneer (eds.), *Visions of History*, Manchester University Press, 1983, p.11; 近藤和彦・野村達朗編訳『歴史家たち』名古屋大学出版会、1990年、66頁。

ように、「ソーシャリスト・ヒューマニズムを、コミニズムの真実として擁護し、それをスターリン主義者の『イデオロギー』が体系的に歪めて裏切った」と考え、「スターリン主義者の歪み (deformation) に対する非難からコミニズムを免罪」することであった³⁶⁾。

トムソンは、スターリニズムを、1つの革命エリートの「イデオロギー」、つまり「現実についての特定の党派的な見方によって導かれる、誤った意識の一形態」として批判する³⁷⁾。そのイデオロギーの特徴は、「人々に対して、反民主主義で、本来的に官僚的で、パターナリストで、あるいは独裁的」であり、「経済的自動主義」であった。つまり思想や制度のような多様な支部 (branches) の「上部構造」は、社会的諸関係としての「土台」を機械的に単純に反映したものにすぎないとされた³⁸⁾。

もっとも、元共産党員であったトムソンは、共産党を離脱したのちも、コミニズムそれ自体を否定したわけではなかった。むしろ彼は「コミニズムの根本的なヒューマニストの内容を信仰」していた³⁹⁾。トムソンは、イギリスにおける「マルクス主義者とコミニズムの伝統」を「再発見」し「再肯定」しようとする。この伝統は、ウィリアム・モリス William Morris やトム・マン Tom Mann のような人びとから生じるとされる⁴⁰⁾。

しかし、テイラーは、トムソンが「コミニズムの諸価値を再び確信することに急ぎすぎている」と批判する。その理由を、テイラーは以下のように示している。

スターリニズムは、単に自己をコミニズムに加えただけではなかったし、単に、主流のコミニズムの発展を歪めるような外在的要素であるだけではなかった。すべての現実的意味において、スター

36) Kate Soper, op.cit., p.208.

37) E. P. Thompson, "Socialist Humanism: An Epistle to the Philistines", *The New Reasoner*, Summer 1957, No1, pp.107-108.

38) E. P. Thompson, "Socialist Humanism (part 2)", *The New Reasoner*, Summer 1957, No1, p.131.

39) E. P. Thompson, "Socialism and the Intellectuals", *Universities & Left Review*, Summer 1957, Vol.1 No 2, p.36.

40) E. P. Thompson, "Editorial".

リニズムはコミュニズムの中から成長してきたのだ⁴¹⁾。

このようにテイラーは、スターリニズムはコミュニズムの外在的要素ではなく、コミュニズムの内的な1つの要素であると考えている。

テイラーによるこのような批判に対して、トムスンはどのように答えたのであろうか。スコット・ハミルトン Scott Hamilton によれば、トムスンは、「コミュニズムが致命的な欠陥のある考え方であるというテイラーの主張に対して、そしてコミュニズムを支持した1930年代の知識人についてのテイラーの非難の発言に対して、怒って答えている」。ハミルトンによれば、具体的には、トムスンは「テイラーが、戦後のスターリニズムの政治を、1930年代に遡って読み込んだ」ことを批判した⁴²⁾。実際、トムスンは、次のようにテイラーに反論している。

歴史的伝統として考えられる、コミュニズムの「根本的なヒューマニストの伝統」についての私の考えを、テイラーは理解するだろうと思う。もしテイラーが哲学的な定義を少しの間、脇に置くならば、そして中国やユーゴスラヴィア、チェコスロバキア、ギリシャにおける1930年代と50年代の出来事に目を向けるならば⁴³⁾。

このようにトムスンは、ユーゴスラヴィアやチェコスロバキアにおける1930年代と50年代の出来事に目を向けるならば、テイラーもまたコ

41) Charles Taylor, "Socialism and the Intellectuals", *Universities & Left Review*, Summer 1957, Vol.1 No 2, p.19. テイラーは、初期マルクスから「疎外」などの概念を引き継いだだが、他方で、マルクス主義者の哲学が、権威主義へと向かう「不完全なヒューマニズム」の傾向を持っているとも考えていた。テイラーは、論文"The Ambiguities of Marxist Doctrine", *The Student World*, 51/2, 1958. においても、マルクス主義者の哲学の両義性を指摘している。

42) Scott Hamilton, *The Crisis of Theory: EP Thompson, the New Left and Postwar British Politics*, Manchester University Press, 2011, p.59. ハミルトンによれば、トムスンは、このようなテイラーのスターリニズム理解は誤りであると考えた。なぜならヨーロッパの共産党におけるスターリニズムの興隆は、「ファシズムとスターリンのエージェント (Stalin's agents) の手によって、政治が破壊され、多くの場合はこれらの政党の全党員が滅亡させられることによって、はじめて可能になった」からである。ファシズムと第2次世界大戦の長い悪夢から現われたこれらの政党は、「古いリーダーの多くを失」ったのであり、したがってスターリンにとって、共産党を「彼の意志に従わせることは容易であった」。

43) E. P. Thompson, "Socialism and the Intellectuals", p.22.

ミュニズムがもつ「ヒューマニスト」の伝統を理解するだろうと述べる。たとえば、チェコ共産党の例を見てみよう。トムスンによれば、ナチスによって完全に滅ぼされたチェコの共産党は、1945年以降において、ソ連の軍司令官や政治家や警察から継続的な圧力と命令を受ける中で、亡命者や強制収容所の老練な兵士たちによって形成された。彼は、そのような歴史的文脈において、チェコのスターリニズムが「コミニズムから生じた」と述べることは正しくなく、また、このような社会的かつ政治的圧力の下でコミニズムの哲学が墮落したと述べるのはもっと正しくないだろう、と主張する⁴⁴⁾。このようにして、トムスは、テイラーがコミニズムの伝統をあまりに単純化していることを問題にしたのである。

もっとも、トムスは、テイラーを全面的に批判したというわけではない。上記のような批判を行った上で、彼は、次のようにテイラーに同意する。

そのような歴史的考察によって、私たちはより明確な哲学的定義へと立ち戻ることができる。私は次の点でテイラーに完全に同意する。「実践の哲学として考えられる」コミニズムを検討する際には、「レーニズム」と呼ばれる多くのものを捨てて、マルクスが書いたものの多く（その非常に多くはその有効性を維持してきたが⁴⁵⁾）を疑って、すべてを検討しなければならないという点である⁴⁵⁾。

このようにトムスは、コミニズムを検討する際には、「レーニズム」と呼ばれるものやマルクスの著作を疑って、検討しなければならないとする。そして、この点では彼は、テイラーの見解に同意しているのである。

それにもかかわらず、トムスは、スターリン以前と以後を区別し、コミニズムの伝統の中から前者を救い出そうとする。そのために、トムスは次のような議論を展開する。彼は、「もし私たちがコミニストの伝統内部の権威主義的で退廃した諸傾向を切り離し非難するつもり

44) Ibid.

45) Ibid.

であれば、私たちは何らかの記述的用語を使わなければならない」と言う。ここで「権威主義的で退廃した諸傾向」であり、そうであるがゆえに「切り離し非難」されるべきとされるものは何か。そのような要素を明らかにするための「何らかの記述的用語」こそが、「スターリニズム」なのである。

トムスンにとって、スターリニズムという用語は、次の点で、「適切な用語」であるばかりでなく、「歴史的に正確」でもある。つまり、この用語は、確かに「スターリニストの諸傾向はスターリン以前の коммуニストの伝統の内部にも存在していた」とはいえ、まさにスターリンによる支配の時代の間こそ、「スターリニストの諸傾向が組織化され、その諸傾向が коммуニストの理論の大部分を腐敗させた」という点を、「適切」かつ「歴史的に正確」に表現するものなのである⁴⁶⁾。

したがって、トムスは、「 коммуニストの伝統」の中心は、あくまでスターリニズムとは異なるものであることを強調する。すなわち、

私たちは、スターリニズムに対する反乱が、同時に、 коммуニストの伝統の内部にその創設以来存在している諸価値と諸傾向を再び宣言しているということを示しているということを理解しない限り、ポーランドとハンガリーの今日の世界も分からないだろうし、ロシアの明日も理解しないであろう⁴⁷⁾。

このように、トムスは、スターリニズムは коммуニズムの中心的要素ではなく、むしろ周辺の逸脱であると考え。それゆえ、スターリニズムへの抵抗もまた、「 коммуニズムの伝統の内部」から生まれると考えるのである⁴⁸⁾。

以上のトムスンとテイラーの見解の違いについて、スコット・ハミルトンは、以下のようにまとめている。

トムスは、レーニンを書いたものの多くと、マルクスの著作の

46) Ibid.

47) Ibid.

48) Ibid.

いくつかを、疑問視する必要がある、おそらく捨て去る必要があるというテイラーの主張に同意する。しかしトムソンは、1930年代の知識人によってコミニズムのためになされた主張を、東ヨーロッパにおける最近の出来事が、反証しているのではなく、証明している、と主張する。トムソンによれば、ポーランドとハンガリーにおけるスターリニズムの反対者たちは、1930年代の人民戦線とつながっているのであり、イギリスのソーシャリストの伝統——「モリス、マン、フォックス Fox、コードウェル Caudwell の伝統」と容易に関連する⁴⁹⁾。

トムソンとテイラーは、スターリニズムを批判し、さらにイギリス労働党で主流であった社会民主主義の考え方も批判する点で共通している。しかし、両者は、次の2点で異なっている。第1に、両者は、スターリニズムとマルクス主義に関する理解で異なっていた。トムソンはマルクス主義には、スターリニズムによってゆがめられる前の良き伝統があると考えた。しかし、ハンガリーにおけるスターリニズムの間接的な体験から出発したテイラーは、コミニズムに対して、より警戒的であり、コミニズム自体に問題があると考えた。

第2に、トムソンとテイラーとは、両者が具体的に期待をかけた実践の種類において異なっている。トムソンは、イギリスにおけるコミニズムを再発見し、新たなソーシャリズムの可能性をひらくためには、実践的には、知識人と労働者間の交流を回復して豊かな労働運動を展開していくことが必要であると考えた。学問的には、トムソンは、経験的な研究にすすみ、イギリスの労働者の中に伝統的に蓄積されてきたコミニティ意識を歴史的な手法でさぐるとし、『労働者階級の誕生』*The Making of the English Working Class*⁵⁰⁾などを執筆する。これに対して、テイラーが行うのは、マルクス主義の政治勢力とは明確な一線を画する改革運動である。具体的には、カナダの新民主党の政治活動である。これは、筆者も別稿で述べるが、テイラーの言うところのソーシャリスト的なものになる。

49) Scott Hamilton, *op.cit.*, p.59.

50) E. P. Thompson, *The Making of the English Working Class*, Penguin, 1968.

おわりに

本稿の目的は、「はじめに」で述べたように、彼がハンガリー難民支援のころから有していたスターリニズム批判の姿勢が、その後のニューレフトとしての理論的かつ実践的活動にどのように継承されていくのかを考察することであった。とりわけ、本稿は、テイラーがニューレフトの活動を行った1950年代後半における、彼のソーシャリズムの思想内容、および、コミニズムに対する厳しい批判について検討した。

まず、本稿の第一節では、テイラーによる理論誌の創設と核兵器廃絶運動について整理した。第1に、テイラーによる『ユニヴァーシティーズ・アンド・レフト・レビュー』の創設であるが、テイラーはハンガリー難民支援からイギリスに帰国した直後の1957年にスチュアート・ホールや、ラファエル・サミュエルらと理論雑誌を創設した。彼は、この雑誌をはじめとしたいくつかの理論誌を基盤に、初期マルクスにおける疎外の研究やスターリニズム批判などを行った。第2に、当時のニューレフト運動を概観した。テイラーをとりまく当時の知的関心では、東側のスターリニズムと西側の帝国主義の両方を敵とする考え方が強かった。そのような考えの人々が「ニューレフト」の勢力を形成した。そのニューレフトの中には、元共産党員であったグループと、共産党とまったく関係のなかったテイラーらのグループがあった。両グループは、1959年に『ニューレフト・レビュー』を創刊する。第3に、テイラーの核廃絶運動について述べたが、テイラーは、オックスフォードの学生のころから核廃絶運動の最も熱心な指導者であった。

第二節では、テイラーが初期マルクスから受けた影響について述べた。その影響の1つは疎外論であった。もともとテイラーは、人間が社会的な絆や共通の意味などから脱落することを疎外と考えていたが、この点はマルクスから学ぶことで強められている。テイラーはマルクスの『経哲草稿』をニューレフトに持ち込み、この意義を論じている。テイラーは、産業社会の発展にともなって、諸個人は疎外され、意味のある活動を失い、消費ではなく創造における真のニーズを満たされなくなると考えるようになる。彼は、このニーズを満たす民主化の思想をマルクスから継承しようとした。さらにテイラーのソーシャリズム構想であるが、

彼はすでにハンガリー事件を間接的に体験しており、共産党による革命は拒否していた。しかし疎外克服のための民主化をして社会的絆を再生するという意味のソーシャリズムを構想した。

第三節では、テイラーのソーシャリズムの内容について、筆者の理解を示した。彼のソーシャリズムは独特なものであり、疎外克服と連帯の2つの要素で構成されていた。しかもテイラーは、一方で当時のコミニズムを否定しながら、他方で、彼のソーシャリズムは、初期マルクスから民主主義的な社会変革の方向性を引き継いだものだと考えていた。

そのソーシャリズムの第1の要素である疎外の克服には、社会における価値の優先順位を、企業本位から、人民本位に転換することが含まれていた。たとえば社会の経済的な投資の配分を、企業本位の市場的配分から、人々のニーズによる配分に転換する必要があると考えていた。第2に、人々のニーズは、労働者をはじめとする人々の連帯をつくり出すことで、発見されると思われていた。その意味で、ソーシャリズムとは連帯そのものであった。

第四節では、スターリニズムとコミニズムとの関係について検討した。ニューレフトの運動の中でも、スターリニズムの萌芽をコミニズムに求めるテイラーと、むしろコミニズムを擁護しようとするトムスンらのグループがあり、両者の理論的な対立について述べた。さらにテイラーのコミニズム批判について検討したが、これは、非常に厳しいものであった。ハンガリー事件を間接的に体験したテイラーにとって、スターリニズムはコミニズムの中から出てきたものであり、その意味で、コミニズムの責任は免れないものだった。経済的自動主義のみならず、労働者階級という概念すらも、スターリニズムの1つの原因であるとして批判した。最後にテイラーに対するトムスンの反発を見る中で、テイラーの特徴を明らかにした。トムスはテイラーとは異なっており、コミニズムには擁護的であった。トムスは、1930年代におけるコミニストのたたかいや、スターリニズムに抵抗してきたコミニストの運動の視点から考えるならば、コミニズムの再生が可能であると考えた。同じニューレフトといっても、両者のあいだには深刻な対立があり、当時のテイラーの思想を理解するためには、単にニューレフトであったという議論では不十分であるので、その中でのテイラーの独特の位置

について明らかにした。

最後に本稿が、その後の、すなわち 1980 年代以降のテイラーについての研究に対して持っている意味について、2 点述べておく。第 1 が政治家テイラーの研究にとっての意味であり、第 2 が思想家テイラーにとっての意味である。

第 1 に、政治家テイラーの研究にとっての意味である。本稿は、政治家としての青年テイラーの最初の姿を明らかにしようとした。ニコラス・H・スミス Nicholas H. Smith は、テイラー政治活動のキャリアを 3 つの段階に分けて、次のように述べている。

第 1 は、1950 年代におけるイギリスのニューレフトへの彼の関与である。第 2 は、1960 年代のカナダの新民主党（New Democratic Party）の内部における彼の政治活動である。第 3 に、1980 年代から 1990 年代にわたるカナダの憲法危機に関する議論への彼の貢献である。テイラーの初期の政治的著作の主な仕事は、ソーシャリズムの意味を明らかにすることであり、ソーシャリストの社会の性質、その社会を実現する際の知識人の役割を明らかにすることであった⁵¹⁾。

このようにテイラーは、一貫して政治活動を行っているのだが、マーク・レッドヘッド Mark Redhead によれば、テイラーの政治家としての側面の研究は西欧においてもガイ・ラフォレスト Guy Laforest のみが行っているにすぎないという⁵²⁾。しかしラフォレストは、政治家としてのテイラーの経歴を紹介する程度の研究しかしておらず⁵³⁾、テイラーの政治実践と政治哲学の関係のあり方を探求するうえではあまり大きな成果をもたらしたものではない。ここから言えることは、政治家テイラーの研究が、まだほとんど行われていないということである。そこで、本

51) Nicholas H. Smith, *Charles Taylor: Meaning, Morals and Modernity*, Polity Press, 2002, p.173.

52) Mark Redhead, *Charles Taylor: Thinking and Living Deep Diversity*, Rowman & Littlefield Publishers, 2002, p.3.

53) Guy Laforest (ed), *Charles Taylor, Reconciling the Solitudes: Essays in Canadian Federalism and Nationalism*, McGill-Queen's University Press, 1993.

稿は、前に述べたような政治家テイラーの3段階のうち、第1段階の様子を明らかにすることを目的とした。筆者は、今後、その後の政治家としての彼のあり方の研究も行う計画である。本稿はそのための出発点である。

では本稿では、政治家テイラーにおけるどのような筋が見えてきたのか。この点について述べる。本稿で明らかにしてきた、ニューレフト時代におけるテイラーの疎外克服論は、その後、主として『政治の形態』（1970年）出版の時期において、社会的疎外や資本主義的疎外として具体的に論じられるようになる。さらに、その克服の方向としてのソーシャリズムも具体性を帯びてくる。例えば疎外克服のための社会的資源配分の優先順位の転換についても、そのための政府による「投資基金」をつくる案を出しているし、連帯の問題も、対話社会の形成という方向で発展させられる。このときテイラーは、カナダの新民主党の副党首であり政治家として活動している。新民主党は、筆者も別稿で述べるように、当時のカナダで最も左派の政党であり、資本主義を改革しようとした。資本主義を改革しようとするという意味で、本稿のニューレフトとしてのテイラーの性格、すなわち、疎外克服と連帯としての政治は、新民主党の活動に引き継がれている。このテイラーの傾向は、その後の第3段階の政治活動においても維持されていると思われる。本稿で明らかにしたかったことは、全体としてソーシャリスティックな傾向をおびている彼の政治活動は、その起点を、このニューレフトの時代にもっていたことである。これがその後どのように生かされていくか、この点は、今後の研究課題としたい。

次に本稿の持つ第2の意味である。つまり、本稿は、その後のテイラー思想を研究するにあたってどのような意味を持つのか、この点について述べる。

ルース・アビイ Ruth Abbey も論じるように、テイラーは、政治思想家としては、1980年代以降の円熟期において、コミュニタリアンとして特徴づけられる。コミュニタリアニズムは、政治、法、社会およびアイデンティティについての諸問題に対する幅広い哲学的アプローチである。アビイによれば、コミュニタリアニズムという名前が示すように「コミュニタリアニズムの一般的な関心は、コミュニティの絆——コミュニ

ティの絆の重要性、創造、維持そして再生産——にある」⁵⁴⁾。

コミュニティは、もちろん、その構成員としての個人を中心にもつのだが、その個人が自律する自由を享受できなければ、個人として成立しない。そこで、コミュニタリアニズムは、だれもが個人の自由を担保できるようにするために、コミュニティの絆による支援が必要だと考えるのである。テイラーのコミュニタリアニズムでは「社会や文化を創造し、再生産し、再形成するのは、純粋に個人的な力ではなく、社会を中心」としていると考えることが特徴になる⁵⁵⁾。貧困を例にとるとわかりやすいが、これを解決するためにコミュニティの絆をつかおうとする。これはきわめて社会的なアプローチであり、資本主義やジェンダーというような社会的問題を視野に入れたうえでの、個人論になる。このような個人論の源流は、本稿が提示してきたニューレフトの彼の思想の中で、すでにはぐくまれている。特に、彼の疎外論では、個人に対して社会がもたらす弊害と、それを克服しようとする思想が芽生えている。ニューレフトにおいてソーシャリズムの役割とされた疎外克服が、のちのコミュニタリアニズムでは、個人をささえるコミュニティの絆の役割として打ち出されていくのである。

アビィによれば、テイラーのコミュニタリアニズムには、さらに実際の社会的問題についての具体的思想および政策論としての側面がある。この側面で、青年期の疎外論は、後に、さらに具体的な社会批判として展開されていくことになる。その際も、個人主義的な社会改革、例えばアトミズム的な個人を基礎とする市場経済の促進などを提案するのではなく、集合的行為を必要とする改革を提案し、社会の共同体と政府が一体となって、広く人びとのニーズを満たす改革を目指す点ではかわらない。その際には、社会全体での人びとの連帯意識を必要とする。従って、本稿で明らかにした連帯としてのソーシャリズムは、その後のテイラーの思想であるコミュニタリアニズムに流れ込んでいくと思われる。

コミュニタリアンとしてのテイラーは「グローバルな資本の運動のような社会的かつ経済的な力」⁵⁶⁾を批判する。日本の菊池理夫も次のよう

54) Ruth Abbey, *Charles Taylor*, Acumen, 2000, p.101.

55) *Ibid.*, pp.102-103.

56) *Ibid.*, p.103.

に述べている。「テイラーは左派としての社会主義、社会民主主義であり、再分配政策に基づく『福祉国家』を望んでいることも主張している」。ただ、「グローバル経済のなかでの経済成長を前提とする福祉国家は現在困難な状況を迎えていることも理解している」⁵⁷⁾。ここで菊池が述べている「社会主義、社会民主主義」は、筆者の用語ではソーシャリズムであるが、この思想も、青年テイラーのニューレフトの時代から芽生えているものであった。本稿で明らかにしたことは、このような、成熟期テイラーのコミュニタリアニズムの重要な構成要素が、すでに青年テイラーの時期から育まれていた点である。

筆者は、このように、テイラーの青年期と円熟期の関係のひとつとして、青年期のソーシャリズムが円熟期のコミュニティアニズムに発展すると理解できるのではないかと考えている。具体的な議論の提示は今後の課題として残すが、ここでは、その見通しを述べて、結論とする。

57) 菊池理夫「現代コミュニティアニズムの諸相」菊池理夫・小林正弥編著『コミュニティアニズムの世界』勁草書房、129頁。